

【4】 ジャイナ教の修行者とその遍歴

[0] ところで今まで、ジャイナ教の修行者とバラモン教の遍歴者 (*parivrājaka*) の「旅」は、ただ独りで、目的地もなく、一処不住の旅をする、いわば遍歴すること自体を目的とする「遍歴」であって、釈尊と仏弟子たちが行った「旅」は決して独りでもなく、はっきりとした目的・目的地のある旅であり、また一処不住でもなかったから、「遍歴」と呼ぶべきではなく、これと区別して「遊行」と呼ぶべきであることを論証しようとしてつとめてきた。しかしながらジャイナ教の修行者とバラモン教の遍歴者の「旅」を、予断をもって「遍歴」と決めつけ概念規定しているという譏りを免れ難いであろうから、そこで順序が逆になったが、今節においてはジャイナ教の修行者の「遍歴」、そして次節においてはバラモン教の遍歴者の「遍歴」について調べてみたい。

なお筆者はジャイナ教に関してはまったくの素人であるので、ジャイナ教側の資料については、次のような図書・論文、すなわち中村元著『思想の自由とジャイナ教』（以下『思想の自由』）⁽¹⁾と渡辺研二著『ジャイナ教』（以下『ジャイナ教』）⁽²⁾や、塚本啓祥・山崎守一両博士などのご論文など、先学や専門研究者の研究成果を参考にさせていただき、これらに引用されているジャイナ聖典の文章についてはできるだけ原典に当たって確認しながら叙述を進めることにしたい。したがって以下に引用するジャイナ教聖典の文章は、基本的には先学や専門研究者の著書・論文の中に引用されているままであって、添えられている原語もまたそのままである。しかし筆者はそれを参照させていただきながら原文にも当たったので、筆者が示したおいた方がよいと考えた原語については*を付して示すことにする。したがって*の付された原語は、元の著書・論文にはないものである。

また特別に注記しない限りは、ジャイナ教聖典は GRETIL - Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Language and related Indological materials from Central and Southeast Asia にアップされた Yumi Ousaka 氏と Moriichi Yamazaki 氏によってインプットされた電子テキストを利用させていただく。

なお、このジャイナ教は原始仏教聖典においてはニガンタ (*nigaṇṭha*) 派に相当し、また原始仏教聖典にもしばしば '*paribbājaka*' が登場するから、この原始仏教聖典に描かれるニガンタ派の修行者や遍歴行者の姿も、併せて調査してみたい。

(1) 「中村元選集 [決定版] 第10巻」所収

(2) 論創社 2005.12.25

[1] ジャイナ教の基本的な教えは、ジャイナ教の専門研究者であられる山崎守一博士の「ジャイナ遊行者の衣・食・住—マハーヴィーラを中心に—」⁽¹⁾という論文の中に、簡潔にして的確にまとめられているので、それを紹介させていただいてこれに代えたい。これには、

ジャイナ教義においては、人が身・口・意の活動を行うと、その人の行為に適した物質 (*puggala*) が流れ込んできて、その人のジーヴァ (*jīva*) に付着する。これが漏 (*āsava*) といわれる。そして、この流れ込んできた物質はジーヴァに付着して、業身 (*kamma-sarīra*) といわれる微細な物質の集合体を形成する。このためジーヴァは

業身に覆い囲まれてしまう。これが縛 (bandha) である。この結果、ジーヴァは昇天して成就者／解脱者の世界に行くことができずに、地獄・畜生・人間・神々の四つの迷いの世界を繰り返し輪廻転生して苦しみが続かないと説かれる。これとは反対に、ジーヴァが解脱者の世界に昇天するためには、自制によって新たな業を作らず (saṃvara= 遮)、苦行によって過去の業を滅ぼす (nijjarā=滅) ことである。

とされている⁽²⁾。

このようにジャイナ教の基本的な教えは、苦行によって過去の業を滅ぼすとともに、新しい業を作らないようにすることであるが、そのためには一切の欲望を捨て、不殺生・真実語・不盗・不淫・無所有という五つの大戒を守って業を制御しなければならないとされ⁽³⁾、これを徹底したものが、家族から完全に出家し、世俗から離れて、裸形であることと、遍歴をおこない、死に至るまでの断食が勧められることであった。

このようにジャイナ教の遍歴は、その教え・思想と密接に関連しているのであって、ジャイナ教の修行者にとっては欠かさずべからざるものと認識されている。

(1) 『神子土恵生教授頌寿記念論集 インド哲学仏教思想論集』2004年3月 永田文昌堂

(2) その他、中村元『インド思想史』pp.047～051、『ジャイナ教』pp.187～194、早島鏡正他『インド思想史』pp.032～036、*Āyār* 2.15 (*Sū*.777,780,783,786,789)、*Tattvādhigama-sūtra* 7.1 塚本啓祥「仏教・ジャイナ教の発生基盤とその形成」(『東北大学文学部研究年報』32 1983.3.30) p.036 以下などを参照されたい。

(3) 業の束縛から離脱するためには行為をなさないこと、出家者とは行為を休止した人とされ = *Āyār*.1.6,1.4 p.28 1.4、悪業をなさず、寂静となり、遍歴することが真実 (sacca) = *Āyār*.1.2,1.3 p.7 1.2、いかなる行為もなさぬこと = *Āyār*.1.2,1.3 p.7 1.2 とされている。『ジャイナ教』pp.187～194

[2] 以上のようにジャイナ教の修行者にとっての「遍歴」は、その修行の核となるものであり、欠くべからざるものであった、とされる。その遍歴については、ジャイナ教聖典には次のように記されている。

[2-1] まずその遍歴は独りで行うべきものであり、『思想の自由』の第1章・原始ジャイナ教の「16 大いなる道ゆき」の「(二) 修行者の生活法」ではその冒頭において、「原始ジャイナ教聖典に現われる修行者は、たいてい隠棲してひとり修行している人々である。ジャイナ教の比丘の生活法は仏教のそれとよく似ている点が多い。これに反して修行者の集団生活は仏教によって始められ、後にジャイナ教やヒンドゥー教にも影響を及ぼしたものであるということが、一般インド学者によって常識として認められている」⁽¹⁾と書き出され、「最初期の修行者はただひとりで暮らすことを理想としていた」⁽²⁾として、次のようなジャイナ聖典の文章が紹介されている(ここに紹介するのはその一部である)。

ここに休止し、それ(業の報い)を滅ぼして、罪 (*ādāniya*) を知り究めて、順次に捨てる。ここに(わが教団の内部でも)ある人々は (**egesiṃ*) 独行 (*ekacaryā * egacariyā*) をなす。そこで順次に種々なる家から清い施食、あらゆる施食を受けて、聡明なるものは遍歴すべきである (**parivvae*)。(*Āy*. I, 6, 2, 3, p. 29, 1.10f)

以上のごとく熟知して、ある人々は、ひとり行く者 (*ekacara * egayare*) として、熟思して、堪え忍び、遍歴すべきである (**parivvae*) ……一切の俗累 (*visrotasikā*)

を捨てて、正見 (samyagdarśana) を得よ。じつに世界においてわが法を知って不退の法あるこれらの人々は、裸行者 (nagiṇa=nagna) と呼ばれる。この最上の説がこの世において人々のために説かれた。(Āy. I, 6, 2, 2-3. p. 29, 1.3f)

村から村へ遍歴しつつある (dūtayamāna * gāmāṇugāmaṇ dūijjamāṇassa)、いまだ明確な自覚に達していないピクに、悪い暮し、悪い行動がおこることもある。(以下略) (Āy. I, 5, 4. -2. p. 24, 1.1f)

そしてこの後で、「林に住み、樹の根にたたずまい、露坐する者であるということは、初期のジャイナ教の修行者の力説していたことであるが、時代の経過とともに、住居に住むこと (vāsāvāsa) を認めるようになった。修行者が信徒の招待を受けるということは実際に行われてきたが、聖典のうちにその禁令は見あたらぬようである」⁽³⁾ とくくられている。

塚本啓祥博士も先に紹介した「仏教・ジャイナ教の発生基盤とその形成」⁽⁴⁾ において、邪命外道のゴースーラが批判して、「かれ (マハーヴィーラ: 筆者) はかつて唯一人で遊行する沙門 (* egaṃtacārī samaṇe) であった。(しかし今や) かれは多くの比丘らに圍繞せられて、彼らのそれぞれに詳細に (法を) 説いている」(Sūy. 2.6.1 Sū. 787) と述べていることを紹介して、「ヴァッダマーナが初期のころには唯一人で遊行する (egaṃtacari, skt. ekānta-cārin) 沙門であったが、今や教団 (gaṇa) を形成して (Sūy. 2.6.2, Sū. 788) 多くの比丘らに圍繞されていたことを指摘している」と書かれている。

またジャイナ教の文献には、

工芸によって生計を立てることなく、家なく、わずか少量を食べ、家を捨てて一人行く (* egacare)、(そのような人は) 比丘である。(Utt. 15, 16)

というような文章も見いだされる。

なお先に引用させていただいた『思想の自由』で紹介されている Āy. の文章は「ある人々は独行をなす」「ある人々はひとり行く者」として、独行・ひとり行くのはすべての修行者ではなく、ある特定の人であることが示唆されていることを注意しておく必要があるであろう。

(1) p. 327

(2) p. 329 以下

(3) p. 330

(4) p. 030 出典の示し場所は筆者が変えた。

[2-2] またジャイナ教の修行者はその遍歴においては、

雨季を除いて夏冬の 8 ヶ月のうち、村落に住むは 1 夜、都市で寝るは 5 夜のみ (* gāme egarāie ṇagare paṃca-rāie)。(Kalpa Sūtra v. 119)⁽¹⁾

というように、一処不住を原則とした。『ジャイナ教』にも「ジャイナ教では、6 月から 9 月までのモンスーンの 4 か月間は、安居といって寺院にこもりっきりの生活を行うための期間である。1 年の残りの期間は同じ場所に 3~4 日だけ留まって、後は遊行を続ける」と解説され⁽²⁾、「同じ場所に居続けて (* ege āsāse) もよいのは、緊急の場合に限られる (Thāṇ. 314a)」という聖典の文章を紹介されている⁽³⁾。ただし『思想の自由』⁽⁴⁾ では、「修行者は行乞のために村に入ってもよいが、そこにあまり長くどまっていたはならないという。その限度は『一ヶ月または雨季』ということになっている」⁽⁵⁾ とされるから、少

し内容が異なる。

- (1) Nand Kishore Prasad [1972年] p.024, 『聖行経』鈴木章信訳 耆那教聖典 昭和5年9月10日 p.142, SBE. vol.22 p.262
- (2) p.026 ここには出典は記されていない。
- (3) p.247 *Ṭhāṇ.* の該当箇所にはそのさまざまなケースが列挙されている。Muni Jambūvijaya ; *Ṭhāṇaṃgasuttaṃ and Samavāyāṃgasuttaṃ*, Jaina-āgama-Series No.3, Bombay 1985, p.132
- (4) p.327
- (5) 著者は出典として、*Āy.* II, 2, 6 (SBE. p.216) を出されているが、ジャイナ原典の該当箇所にこのような文意に相応する文章は見いだせない。

[2-3] またジャイナ教の修行者が遍歴において泊まる場所は、僧院のような設備の整ったところではなかった。山崎守一博士の「沙門の国土観」⁽¹⁾ という論文では、

この「一人行く (*egayā)」修行者、すなわち沙門の逗留した所 (*vāso) は、ジャイナ教聖典の *Āy.* I, 9,2, 2-3 によれば、作業場 (āvesaṇa)、集会所 (sabhā)、水を置く小屋 (pavā)、市場 (paṇiya-sālā)、工場 (paliya-ṭṭhāna)、藁小屋 (palālapuñja)、旅行者のための家 (āgantārā)、庭園 (ārāma-agāra)、墓地 (susāṇa)、空き家 (sunna-gāra)、木の根元 (rukkha-mūla) であり、*Utt.*2. 20 によれば、墓地 (susāṇa)、空き家 (sunna-gāra)、木の根元 (rukkha-mūla) である。また (*Āy.* I, 8, 2, 1 では) 「比丘は墓地、空き家、木の根元⁽²⁾、陶工の店 (*kumbhār' āyayaṇa) において寝起きすべきである」ことが説かれている⁽³⁾。

とされている。なおこの論文には触れられていないが、*Utt.*2. 19 には比丘は遍歴すべき (parivvāe) であることに言及されている。

また『ジャイナ教』⁽⁴⁾ においても、「大通りや広場、市場などの人の集まる場所、竹や木の根元 (*Ṭhāṇ.* 157a) などは僧侶のみの滞在場所」であって、カルバーストラにはマハーヴィーラ伝が含まれておりますが、そこには『尊者は雨期を除き、夏冬8ヶ月の内、村落に住むのは僅かに1夜 (*gāme egarāie)、都市に寝るのは僅かに5夜のみである (*ṇagare paṃca-rāie)』(119 偈)とありますと、先に紹介したカルバーストラを引用されている。

- (1) 『日本仏教学会年報』58号 平成5年5月 pp.050~051 出典については註によって偈の番号を筆者が補った。
- (2) この前に「山の洞窟 (giri-guhā)」があるが、この論文では省略されている。
- (3) なお山崎氏は、仏教の出家修行者の生活すべき場所として次の、「比丘は世を厭い、人のいない座所 (āsana)、樹の根元 (rukkha-mūla)、墓地 (susāṇa) に親近し、山間の洞窟のなかに (pabbatānaṃ guhāsu) いる」(*Sn.*958)、「比丘は喧騒のない座所・臥所に住すべきである」(*Sn.*925)、「牟尼は木の根元に立って、あるいは座所につくべきである」(*Sn.*708) という句を紹介して、仏教もジャイナ教も同様の修行形態をとっていたと主張されている。しかしながらむしろここに紹介された文章にこそ、これら2つの宗教の修行者の在り方の相違が現れていると見るべきであろう。なぜなら、ここに紹介されたジャイナ教の修行者の逗留すべきとして示された場所は、作業場、集会所、水を置く小屋、市場、工場、藁小屋、旅行者のための家などであることからわかるように、遍歴を前提とした宿泊場所であることは明かであるが、*Sn.*に示された樹木の根元・墓地などは住し (vihāraṭi)、坐禪 (jhāyati) すべき坐処 (āsana)・臥処 (sayana) として示されているのであって、必ずしも遍歴を前提としたものではないからである。また早島鏡正博士は『初期仏教と社会生

活』pp.028～038において原始仏教時代の臥坐処の種類を調査されているが、その結論は阿蘭若、林、叢、樹下、庵 (assama)、山 (vana, vanasaṇḍa)、洞窟、岩山、露地、靈園・靈地・靈樹 (チエーティヤ)、塚間・墓地、藁堆、窪地、岸辺であって、町や村の中にある施設は含まれていない。したがってこれらは必ずしも遍歴のための宿泊所とはなりにくい場所であって、仏教の修行者は定住を前提としているのである。なお山崎氏は「仏教やジャイナ教が独自の集団として活動を始める以前、つまり、バラモンに対抗して遊行・遍歴する沙門の集団としての共同生活を送っていた頃に形成された共通の行法であって、彼らが独自の宗派を形成した最初期の頃においても、その実践道として採用されたことを想定することは可能であろう」「沙門の実践道」(『仏教学』第30号 1991年3月) p.026 (L) とも書かれており、筆者のいう通説に与せられているのである。

(4) p.252

[2-4] そして世間から可能な限り遠ざかろうとしたとされる。『ジャイナ教』(1)は「(マハーヴィーラは)女性を近づけず、人と交わらず、問えども答えず、礼するも受けず、……打たれても動揺せず罵られてもひるまず、ただ黙々と瞑想に専念し……2カ年以上、冷水を使ったり求めたりしなかった (*avi sâhie duve vase sîodaṃ abhoccā nikkhante)」(2)とし、「僧侶が相互に話してよいのは (Thāṇ. 216b)、道を尋ねる場合や道を教える場合、食物を交換する場合」であるともされ(3)、その著者である渡辺研二氏の「Uttarajjhāyāの研究I」(4)という論文では *Uttaradhyayan Sūtra*, 23.29, S.B.E.45, p.12 を紹介され、「在家の人々と接触せずに、住家を持たずに遍歴すべきである (*asamsatte gihatthehiṃ aṇieo parivvae) (19)」とされている。

また『思想の自由』(5)においても、出家修行者は「いかなるしかたでもって在家との接触をもってはならない (*na ya keṇai uvāeṇaṃ gihi-jogaṃ samāyare) (Dasav.VII, 21)」、「在家との接触を捨てよ (*asamsattaṃ gihatthesu) (Utt. III, 6; XXV, 28)」という聖典の文章が紹介されている。

(1) p.097

(2) ここでは典拠を Āy.19 と示しているように思われるが、Āy.には19に相当する部分はない。おそらく I, 9, 11 前後であろう。

(3) p.247 Thāṇ.に該当箇所が見いだせなかった。

(4) 『大正大学大学院研究論文集』創刊号 pp.240-241

(5) p.299

[2-5] 以上のように、ジャイナ教の教えの根幹は過去の業を滅して、新しい業を作らないことによって、解脱が得られるとすることであって、そのための必要条件が苦行であり、無所有であって、遍歴はその大きな柱の1つであった。したがって遍歴は解脱のための必要欠くべからざる条件であり、遍歴なしにジャイナ教は考えられないとしなければならない。そしてジャイナ教の「遍歴」は無所有、無一物を象徴的に体現するものであったから、ただ一人での、一所不住が原則であって、どこそこに滞在して何をするというような目的と目的地を有するものではなかった。仏教の五戒は不殺生・不与取・不邪淫・不妄語・不飲酒であるが、ジャイナ教のそれは第5が無所有であることがそれを象徴的に示している(1)。

(1) 「中村元選集[決定版]第10巻」『思想の自由とジャイナ教』pp.155,173, 243～244, 272, 273 (遍歴)、276, 285, 295, 299, 322, 329, 337, 339, 347, 366 参照。

[3] ところでこのジャイナ教は原始仏教聖典においてはニガンタ (*nigaṇṭha* 離繫) 派と言いつけられ、ジャイナ教の開祖とされ、釈尊と同時代に活躍した人物として知られるマハーヴィーラはニガンタ・ナータプッタ (*Nigaṇṭha Nātaputta*) として登場する。このニガンタ派、あるいはニガンタ・ナータプッタは原始仏教聖典においては、次のようなものとして描かれている。

[3-1] まず、苦行によって故業を滅し、新業を作らないということが苦を滅し、解脱に導くというジャイナ教の基本的な教えは、原始仏教聖典の中にも忠実に伝えられている。すなわち *MN.014 Cūḷadukkhakkhandha-s.* (苦蘊小経 vol. I p.091) においては、

世尊がかつて王舎城の靈鷲山におられた時、多くのニガンタ派の人々がイシギリの山腹の黒山において、常立して (*ubbhaṭṭhaka*)、坐することを排する (*āsana-ṭṭikkhitta*) 行を行い、激しい激しい鋭い苦しみの感覚を受けていた (*opakkamikā dukkhā tippā kaṭukā vedanā vediyanti*)。そこで世尊がなぜそのような行いをするのかと質問すると、ニガンタ派の徒は「ナータプッタは全知全見 (*sabbaññū sabbadassāvī*) であって、彼は次のように説く。以前になした悪業はこの激しい難行によって滅せよ (*pubbe pāpaṃ kammaṃ kataṃ, taṃ imāya kaṭukāya dukkara-kārikāya nijjaretha*)、今ここに身をもって防御し、言葉をもって防御し、意によって防御して、未来に悪業をなさないようにせよ (*ettha etarahi kāyena saṃvutā vācāya saṃvutā manasā saṃvutā taṃ āyatim pāpassa kammaṃ akaraṇaṃ*)。このようにして苦行によって以前になした悪業を滅ぼし (*purāṇaṃ kammaṃ tapasābyantibhāvā*)、新しい業をなさないことによって未来の漏なく (*navānaṃ kammaṃ akaraṇā āyatim anavassavo*)、未来の漏がないがゆえに業は滅し (*āyatim anavassavā kammakkhaya*)、業が滅するがゆえに苦しみが滅し (*kammakkhaya dukkhakkhaya*)、苦しみが滅するがゆえに感覚が滅し (*dukkhakkhaya vedanākkhaya*)、感覚が滅するがゆえに一切の苦しみが滅する (*vedanākkhaya sabbam dukkham nijjinaṇam bhavissati*)、と。私たちはこれをよしとして喜んでるからだ」と答えた。

とし、*MN.101 Devadaha-s.* (天臂品経 vol. II p.214) にも同じことが記されている。なお前者の対応漢訳である『中阿含』100「苦陰経」(大正01 p.586中)は、ニガンタたちが行っていたことを「行不坐行常立不坐受極重苦」とし、ニガンタの所説を「若宿命有不善業因此苦行故必當得盡。若今身妙行護口意妙行護。因縁此故不復作惡不善之業」とし、後者の対応経である『中阿含』019「尼乾経」(大正01 p.442中)はその所説を「汝等若本作惡業、彼業皆可因此苦行而得滅盡。若今護身口意、因此不復更作惡業也」としている。また *AN.003-008-074* (vol. I p.220) にも、ほとんど同様のニガンタの所説が紹介されている。

また『増一阿含』041-001 (大正02 p.744上)には、釈尊の苦行時代のこととして、そのとき多くの尼犍が修行していたと回想されている。そのとき尼犍子らは、手を挙げ、日を指し、身体を曝して学道し、あるいは蹲って学道していた。その理由を聞いたところ、「昔不善行をなした。今苦しむのはその故であるから、その罪を滅しようとするのである。今形体を露にし、恥ずかしい思いをしているけれども、これもこれを滅せんがためである。行が尽きれば苦も尽き、苦が尽きれば行もまた尽き、苦行が尽きれば涅槃に至る」と答えた、とし

ている。

このように、これら原始仏教聖典の伝えるニガンタ派の所説は、まさしく [1] において紹介した、ジャイナ教の専門学者がまとめるジャイナ教の教えとぴたりと重なるというよいであろう。

また『中阿含』012「毘婆沙經」（大正01 p.434上）には次のように記されている。

目連が中食後に比丘らと所用があつて講堂に集まっていた。そこへニガンタの弟子の毘婆沙がやってきたので、目連が「もし比丘が身口意を護れば、これによって不善漏が生じ、後世に至らしめるか」と質問した。毘婆沙はそうだと答え、「前世に不善行を行う者があれば、これによって不善漏が生じ、後世に至らしめる」と言った。これを釈尊に報告すると、釈尊は毘婆沙に質問があれば質問し、反論があれば反論せよと前置きして、「もし不善の身口意業の漏・煩惱・憂愁を生じれば、後に不善身行が滅して、さらに新業を作らず、故業を棄捨し、現世において究竟するのか」と尋ねられた。毘婆沙は自分の主張を撤回した。そして優婆塞となった。

少々分かりにくいところがあるが、善業であれ、悪業であれ、業のすべては迷いのもととするニガンタ説を、仏教の善因楽果、悪因苦果という立場から批判したものであろう。

[3-2] また原始仏教聖典においては、仏教は意業を尊重するに対し、ニガンタ派は身業を尊重するともする。すなわち *MN.056 Upāli-s.* (優婆離經 vol. I p.371) は、

ニガンタ・ナータプッタはニガンタ派の衆 (*nigaṇṭha-parisā*) と共にナーランダールに住していた。そのときニガンタ派のディーガタパッシン (*Dīghatappsin*) がナーランダールで乞食したのちに、パーヴァーリカのアンバ林 (*Pāvārikambavana*) におられた釈尊のもとにやって来た。釈尊は彼に「ニガンタ・ナータプッタは悪業の作用や、悪業の転起をどのように考えているか」と尋ねられた。彼は「ナータプッタは身罰 (*kāyadaṇḍa*) と口罰 (*vacīdaṇḍa*) と意罰 (*manodaṇḍa*) の三罰 (*tīṇi daṇḍāni*) を施設し、悪業の作用や、悪業の転起において身罰がもっとも罪が重い (*mahā-sāvajjarataram*) と考えている」と答えた。これに対して釈尊は「如来は罰であるとは施設しない。業であると施設し、三業のうち意業がもっとも重い」と説かれた。

とする。『中阿含』133「優婆離經」（大正01 p.628上）もほぼ同じ内容である。

また『増一阿含』052-007（大正02 p.826下）にも、

波斯匿王が世尊を訪ね、尼乾子（ニガンタ）は常に身行・意行を計って、口行を計らないといった。これに対して釈尊は「尼乾子は愚惑にして意が錯乱しているから、身行の報、口行の報を受け、意行は言うに足りないというのは、意行は形がないから見るできないからだ」とされ、意根が最も重く、口行身行は言うに足りない」と答えられた。

とする。『ジャイナ教』に「最初期の仏教が業を精神的なものと考えていたのに対し、ジャイナ教は業を物質的に考えていた」⁽¹⁾ とされ、長崎法潤氏の「ジャイナの業思想」⁽²⁾ という論文においては、ジャイナの後期の論書では業を物質的な業である *bhāva-karma* と精神的な働きをもった *dravya-karma* に分けるが、「カルマ物質は最も微細で、ジーヴァと結びついて業身を作るから、物質的な業だけでジーヴァを阻害することができるはずである。ジャイナ教の伝統説からはすれば、さらに精神的な働きをもった業を想定する必要がある

か」とされているから、ジャイナ教の教説はおそらくこれも原始仏教聖典が説くとおりのものであろう。

(1) p.188

(2) 雲井昭善編『業思想研究』平楽寺書店 昭和54年2月 所収 p.529

[3-3] しかし原始仏教聖典の伝えるニガンタ派の禁戒は、*DN.002 Sāmaññaphala-s.* (沙門果経 vol.I p.047) (1)、*SN.002-003-010* (vol.I p.065) などの紹介する「四種の禁戒による制御 (*cātu-yāma-saṃvara-saṃvuta*)」であって、それは「すべての水を制し (*sabba-vāri-vārito*)、すべての水によって〔悪を〕を制し (*sabba-vāri-yuto*)、すべての水によって〔悪を〕を除き (*sabba-vāri-dhuto*)、すべての水によって〔悪の制御を〕体得する (*sabba-vāri-putṭho*)」(2) というものであって、これは一般に知られるパールシュヴァアの4種禁戒＝殺生・盗み・虚言・所有を離れるとも、これをマハーヴィーラが修正した5種禁戒＝不殺生・真実語・不盗・不淫・無所有とも異なって奇異な感じを与えるが、しかし次のものはそれらとぴったりとはではないがよく似る。すなわち

SN.042-008 (vol.IV p.317) : ときにニガンタ・ナータブッタの弟子であるアシバンダカプッタ (*Asibandakaputta*) という聚落主が、ナーランダールのアンバ林に住されている釈尊のもとを訪れた。釈尊は彼に「師は弟子たちにどのような教えを説いているか」と尋ねられた。彼は「我が師は殺生、不與取、邪淫、妄語をなす者は悪趣・地獄に落ちる。その行いが多ければ多きにしがってそのようになる、と教えている」と答えた。

『雑阿含』916 (大正02 p.231下) : ときに尼捷若提子の弟子である刀師氏という聚落主が、釈尊のもとにやって来た。釈尊は彼に尼捷若提子の所説を尋ねられた。彼は「殺生、偷盗、邪淫、妄語をなす者は地獄に墮すと説いている」と答えた。

『別訳雑阿含』131 (大正02 p.424下) : 世尊は那羅健陀城 (*Nālandā*) の賣暈園林 (*Pāvārikambavana*) におられた。そのとき結集論者 (造論姓) 聚落主は尼乾陀若提子の弟子であったが、今は師のところに行くべきでないと考えて、世尊のもとにやって来た。世尊は尼乾陀はどんな教えを説くのかと質問され、殺生や偷盗、邪淫を行うと地獄に落ちると説いていると答えた。

とされている。ちなみにジャイナ教の四誓戒には「不淫」は含まれていないが、それは「無所有」の中に含まれていると解釈されている(3)。

(1) 相応漢訳の『長阿含』027「沙門果経」(大正01 p.107上)には該当するような教説は紹介されていない。

(2) 『原始仏典』長部経典Iに収められた森祖道氏の訳を参考にした。p.071

(3) 『思想の自由』p.181

[3-4] そしてその禪定形態も、ジャイナ教自身が伝えるものと同様のものを原始仏教聖典も伝えているということができる。すなわちジャイナ教では、マハーヴィーラは立ったままの禪定をしたと伝えられるが(4)、先に紹介した原始仏教聖典の中にも、ニガンタ派の修行者たちは「常立して坐することを排する行」「不坐行常立の行」を行っていたとする。

(1) 「白骨の村」で立ったまま禪定をしていた(『思想の自由』p.690)、マハーヴィーラは宗教的修行の12年の間、チャンマーニー村の近くの一本の木の下で立ったまま禪定していた(『思想の自由』p.697)。

[3-5] また原始仏教聖典では、ニガンタ派の習俗であると明示しているわけではないが、

ニガンタ派のサッチャカ (Saccaka) が語る次のような生活のあり方も、ジャイナ教のものと多くの部分で一致する。

MN.036 Mahāsaccaka-s. (薩遮迦大經 vol. I p.237) : 釈尊から身修習とはどういうものであると理解しているのかと聞かれて、ニガンタ派のサッチャカが次のように答えた。

「例えば、ナンダ・ヴァッチャ (Nanda Vaccha)、キサ・サンキッチャ (Kisa Saṅkicca)、マッカリ・ゴースーラ (Makkhali Gosāla) などは、裸形 (acelaka) であって、不作法者であり、手を舐める者であり (hatthāpalekhana)、来れという請いを受けず (na ehibhadantika)、留まれという請いを受けず、もたらされたものを受けず、特に設けられたものを受けず、特定のところへの請いを受けず、彼らは釜の口より直接なものは受けず (na khumbhīmukhā patigaṇhanti)、壺 (kaḷopī) の口より直接なものは受けず、鬮のなか、棒の間、杵の間にあるを受けず、2人食する時その1人から与えられたものを受けず、妊婦・授乳中の婦人・男に抱擁されつつある女より受けず、飢饉の際に集められたものを受けず、犬が近くに立ったところでは受けず、蠅の群がるものを受けず、魚・肉を食せず、穀酒・果酒・粥汁を飲まず、一家受食者であって一口食に住し (ekagārikā vā honti ekālopikā)、二家受食者にして二口食に住し、あるいは七家受食者にして七口食に住す。また一施によって暮し、また二施によって暮し、また七施によって暮らす。あるいは1日に1食、あるいは2日に1食、あるいは7日に1食を摂る。このようにして半月に一食の定期食修行に従事している」と⁽¹⁾。そして釈尊の彼らはそれのみをもって過ごしているのか、という問いに、「彼らは時には殊妙なる嚼食や噉食を食し、殊妙なる味食を味わい、殊妙なる飲料を飲む。彼らはこれによって身に力を得、肥満している」と答えた。そして彼らの「心修習はどのようなものか」という質問には答えることができなかった。そこで釈尊は、「実にそのような身修習は聖者の律における如法の身修習ではない」として、正しい身修習・心修習を説かれた。

(1) これは釈尊が6年間に修したという「苦行」の内容と全く同じである。ただし釈尊はこの他にも「貧穢行」「嫌悪行者」「独居行」を行ったという。*MN.12*, *MN.100* 参照。

[3-6] また資料数が少ないながら、男性の修行者は裸形で、女性の修行者は一衣であつたらしいことも知ることができる。すなわち、

『五分律』「雑法」(大正22 p.171中) : 時に比丘たちは裸で浴した。ニガンタのごとくして風法あることなし、という非難が生じた。浴衣を着せよ。

Therīgāthā Vs.107~111 : [もとニガンタの徒であつた跋堤尼 (Bhaddā purāṇanigaṇṭhi) の偈] 自分は昔は髪を断ち、ただ一衣を着けて、ただ1つの衣をまもつて放浪し (carim)、罪過のないものを罪過があるものを考え、罪過のあるものを罪過がないと見なしていました。

というとおりであり、先に紹介した『増一阿含』041-001 (大正02 p.744上) のなかにも、「尼媿子らは今形体を露にして恥ずかしい思いをしている」としている。

[4] 以上のように原始仏教聖典の伝えるニガンタ派の教説やその修行・生活形態は、ジャイナ教の聖典自身が伝えるものと非常によく一致する。しかし本論文が主題とする「遍歴」についてはどうであろうか。

[4-1] 実は原始仏教聖典の中には、ニガンタ派の修行者が遍歴をもっぱらとしていたとする資料はほとんど見いだせない。最もそれらしい資料は、直前に紹介したもとニガンタ派の修行者 (*purāṇanigaṇṭhī*) であったというバツダー (*Bhaddā*) 尼が

昔は髪を断ち、ただ一衣を着けて、ただ1つの衣をまとめて放浪し (*carim*)、……善来具足戒によって出家してから、アングとマガダとヴァッジとカーシとコーサラとを往来して (*ciṇṇā*)、50年の間負い目なくラッタピнда (*raṭṭhapiṇḍa*) を食した。

Therīg. vs.107~110

という偈である。ここにいうラッタピндаというのは、「モノグラフ」第13号に掲載した【論文15】「パーリ仏典に見る *janapada* と *raṭṭha*」に書いたように、文化を共有する地縁血縁を基礎とするようなゲマインシャフト的な *janapada* としての「国」を越えて、より広い行政単位としてのゲゼルシャフト的な *raṭṭha* において、地縁血縁的な関係を離れた一般社会から布施を得て食するということを意味し、したがってバツダー尼はまさしく「諸国漫遊」的な遍歴をしていたと考えられる。もっともこれはすでに仏教において出家して以降のことを言っているのであって、けっしてニガンタの徒であった時にそうであったというのではないが、仏教において出家してからもニガンタの修行者としての生活を続けていたかも知れないと解釈すればの話である。

その外には、例えば次のようなものしか見いだせない。

SN.042-009 (vol.IV p.322) : その時ナーランダは飢饉で、食を得るに困難で白骨野に満ち 籌食が行われた (*tena kho pana samayena nālandā dubbhikkhā hoti dvīhitikā setaṭṭhikā salākāvuttā*)。そのときニガンタナータプッタの弟子であるアシバンダカプッタ (*asibandhakaputta*) 聚落主は世尊が大比丘衆と遊行されていることを非難した。

これはニガンタの徒が飢饉の時に大比丘衆を引き連れて遊行される釈尊を批判としたというのみであって、これも彼らが一人での遍歴を行っていたという背景があつての非難と仮定すればの話であって、証拠としてはきわめて薄弱である。対応する『雑阿含』914 (大正02 p.230中)、『別訳雑阿含』129 (大正02 p.423中) にも同様のことが記されている。

[4-2] このように、原始仏教聖典のニガンタ派の修行者についての記述からは、彼らがジャイナ教聖典のいうような、ただ一人での行方定めぬ一処不住の遍歴を行っていたということを知ることは難しい。むしろニガンタ・ナータプッタも六師外道の中に数えられて、

サンガを持ち、集団を保ち、集団の師として有名であり、名声あり、開祖で、立派な修行者であると、多くの人々に認められている修行者・バラモンたちがいます (1)。

と表現されることが多く、これによればニガンタ・ナータプッタもニガンタ派の修行者たちも、集団生活を行っていたという印象を受ける。

(1) *SN.003-001-001* (vol. I p.068)、*MN.030 Cūlasāropama-s.* (心材喻小経 vol. I p.198)

[5] 上記のように原始仏教聖典が記述するニガンタ派の教説や修行・生活形態は、ジャイナ教自身の聖典がいうところときわめてよく一致するのであるが、こと「遍歴」に関してはかなりの乖離を示しているといわなければならない。いったいこれは何を意味するのであ

ろうか。

ジャイナ教聖典自身の中においても、通説にいわれるほど、ただ一人の一処不住の遍歴に言及される文章は少ないようであるから、実際にはそれほど遍歴していなかったということかもしれない。それに遍歴に言及する部分は、「(わが教団の内部でも) ある人々は独行 (ekacaryā) をなす」というものであり、読みようによっては特殊な人々は遍歴していたということかもしれない。このことについては、バラモン教の修行者の遍歴を調査した後で再び取り上げることとしたい。